

第2章 主要指標の見通し

1. 人口の推計

(1) 総人口の推計

現在の両市町の住民基本台帳等^{*1}によると、本圏域は既に147,000人を上回る人口規模となっています。ただし、今後は少子高齢化の影響を受け、新市においても、しばらく微増傾向が続くものの、緩やかに人口が減少していくと思われれます。

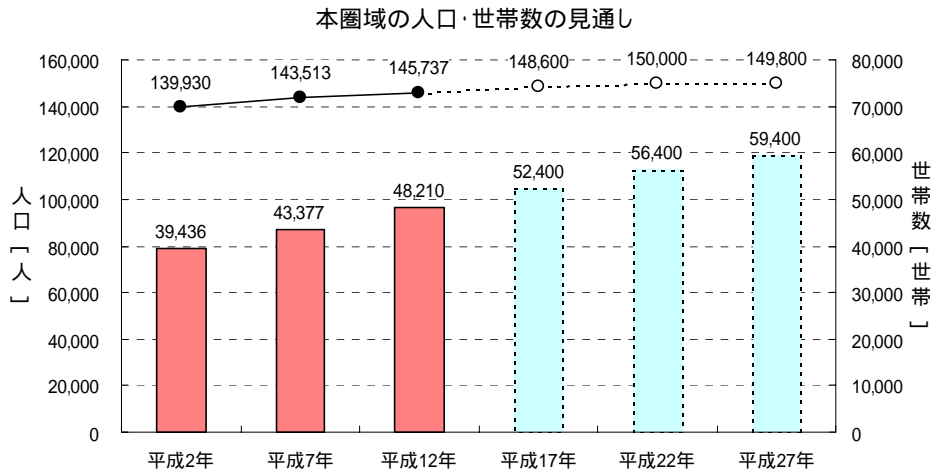
一方、新市建設計画の着実な推進により、新市として一体感ある施策の展開、さらには、新産業の創出や交流産業の拡大により、魅力的な都市(まち)づくりが行われていきます。

そこで、現時点の人口規模、新市での「魅力ある都市づくり」効果による流入人口を加味し、人口目標を設定しました。人口のピーク時を平成22年150,000人とし、平成27年における人口目標を、149,800人とします。

*1 住民基本台帳及び外国人登録原票

(2) 世帯数の推計

世帯数については、“総人口見通し”を“世帯規模見通し”〔概ね10年後(平成27年)の1世帯当たりの人員は2.52人〕で除して求めた結果、約59,400世帯と推計されます。



*平成7年と平成12年の住民基本台帳等をもとに、コーホート要因法での推計に人口目標における期待値を加味したものの。

(3) 年齢3区分別人口

年齢3区分別の人口比率は、上記見通しの推計結果を受け、年少人口14.0%、生産年齢人口60.7%、老年人口25.2%となり、全国的な傾向と同様に生産年齢人口の減少及び老年人口の増加傾向が読み取れます。

そこで、総人口の見通しとして想定した149,800人から、年齢3区分別人口については、年少人口を約21,000人、生産年齢人口を約91,000人、老年人口を約37,800人と推計されます。

(4) 就業人口の推計

就業人口見通しについては、“15歳以上人口見通し”に“就業率見通し”〔概ね10年後（平成27年）の就業率は57.9%〕を乗じて求めた結果、約74,600人と想定されます。

また、産業別就業者数は、“就業人口見通し”に“各産業ごとの就業者数割合見通し”（第1次産業0.9%、第2次産業30.2%、第3次産業68.9%）を乗じて求めた結果、第1次産業約700人、第2次産業約22,500人、第3次産業約51,400人と想定されます。

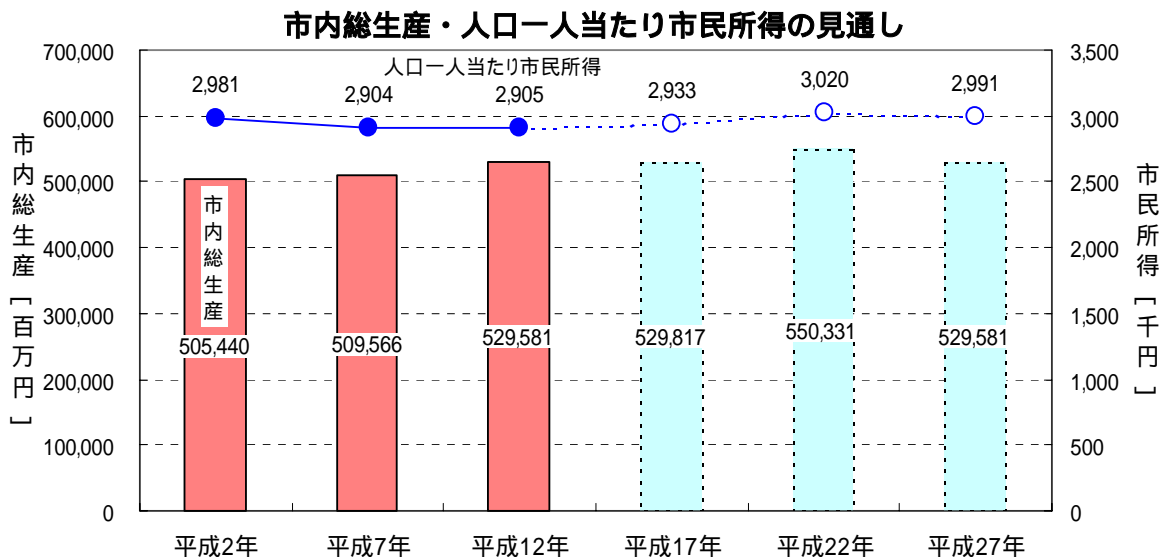
2. 経済

(1) 市内総生産

平成27年の市内総生産を概ね5,296億円と想定します。市内総生産は、今後は、少子高齢社会の進展による就業者数の減少によって大きなマイナス要因もありますが、テクノプラザ2期事業の推進に伴うITやロボット分野など新産業の創出、河川環境楽園を中心とした観光・交流産業の拡大等により減少局面には至らないものと思われま

(2) 市民所得

平成27年の人口一人当たり市民所得を概ね2,991千円と想定します。人口一人当たりの市民所得は、市内総生産と密接な関係にあることから、市内総生産とほぼ同様に推移すると思われま



第3章 新市建設の基本方針

1. 新市の将来像と基本哲学

1-1 新市の将来像

『元気な大交流都市』

- 公園都市・共生都市・快適産業都市へ -

新市は、木曽川の恵みを受けた豊かな自然にあふれ、名古屋から30km圏内という広域的な交通条件のなかで発展してきた地域です。学校や集会施設、道路網等の基礎的な社会資本の整備充実が概ね終了し、現在は、都市基盤整備の一層の充実に加え、生涯学習の推進や福祉医療サービスの充実など、成熟した都市への転換期に入りつつあります。その一方で、未来に向け、個性あるまちづくりの原動力となる産業面や基盤整備への投資も、積極的に進められてきています。

太古、木曽川と伊勢湾の恵みを求めて人々はこの地に集まりました。中世には東西の覇権が何度もぶつかり合いました。この地を支配することが天下を治めることにつながったからです。近世、川と街道は、人とモノと文化を運び、やがて、飛行機を造る人々が集まり、新しいまちができました。

そして現代から未来へ。各務原地区では、航空宇宙・自動車など輸送機器関連産業を中心とした工業集積力に加え、近年では、IT・VR技術・ロボット技術・バイオテクノロジーなどの先端産業が積極的に創出され、未来に向けて、世界的規模の技術交流が期待されています。また、川島地区では、年間300万人以上が訪れる「河川環境楽園」が整備され、サービス産業の振興と雇用の拡大とともに、重要な交流拠点として期待されています。さらに、東海北陸自動車道と東海環状自動車道とのジョイント、国道21号坂祝バイパスの開通は、新しいスタイルの人の交流と産業の進化を予感させます。

過去から未来へと、この地域の発展のキーワードは『交流』なのです。新しいまちづくりには、歴史と現状と未来の展望を踏まえた“交流拠点の整備”が不可欠です。人々が集まり、生活し、交流する中で生まれる調和が、やがて、“大交流都市”へと進化していきます。ここに新市誕生の意義があります。

そこで、まちづくりに関わる動向や課題を踏まえつつ、圏域の特性を活かし、新市がめざすべき将来像を次のように決めました。

『元気な大交流都市』 - 公園都市・共生都市・快適産業都市へ -

「元気な大交流都市」とは、「豊かな自然と都市が調和し、すべての人々が生き生きと活動し、産業が成長を続け、交流がもたらす活気にあふれた元気で美しいまちづくり」をめざすもので、以下の顔を持つ都市でもあります。

【公園都市】

自然と都市機能を調和させることにより、生活の場・仕事の場である都市に、自由時間を楽しむ場や“癒し空間”を提供する、**日本初のパークシティをめざします**

【共生都市】

世代間、障害のある人となない人、市街地と田園地帯、森や川と都市、歴史と未来、伝統と先端技術、モノと文化・芸術など、あらゆるものが共生する豊かな都市をめざします。

【快適産業都市】

快適とは生活を、産業は活力を意味します。市民が快適に生活できるとともに、新たな情報・技術や英知の結集を活かした付加価値の創造により、地域産業が発展しつつ、活力ある新規産業が生まれる都市をめざします。

1-2 新市の基本哲学

将来像実現のために、新市建設の基本哲学に、三つのバランスを織り込みました。

「モノと心のバランス」「進歩と伝統のバランス」「個人と共同体とのバランス」

【モノと心のバランスとは】

戦後、モノへのあくなき追求という「物質主義」に対し、モノがいくら増えても心は満たされないことへの疑問や反省から、お金やモノだけでなく心の豊かさを実感することへと変化してきています。とかく、ヒトとヒトが無機質な関係となりがちな時代だからこそ、心のふれあいが重要視されます。

【進歩と伝統のバランスとは】

日本での「古きこと イコール 悪い」という風潮に対し、欧米では、「古い」には、良い、親しみがある、守るべき、という意味が与えられています。地域固有の歴史、文化を守り、そして学び、古きものと新しいものとの調和を図ります。

一方、既存産業の振興とともに、産業の高度化や新産業の創設を図ることも重要です。

【個人と共同体とのバランスとは】

現代社会においては、行き過ぎた「個人主義」により伝統的な共同体が崩壊の危機に瀕しています。個人・家庭と地域社会の関係、あるいは市民と都市（共同体）との関係、個人とそれが属する集団とで、協働し、相互に協調し合う社会が望まれています。

この都市経営上の基本哲学である三つのバランスを堅持・再生することで、「元気な大交流都市」の実現をめざしていきます。



2 . 新市の基本方針

新市の将来像「『元気な大交流都市』 - 公園都市・共生都市・快適産業都市へ - 」の方向性を明らかにするため6つの基本方針を定めます。

将来像

基本方針

『元気な大交流都市』

公園都市・共生都市・快適産業都市へ

(健康福祉)
すべての人々が
豊かな生活を満喫できるまちづくり

(教育文化)
生きがいと創造力を育み
豊かな心と人の和を広げるまちづくり

(快適安全)
快適で安全な
生き生きしたまちづくり

(環境共生)
自然と共生する
環境にやさしいまちづくり

(産業活力)
活気に満ち、
創造力にあふれるまちづくり

(市民協働)
協働の精神に支えられた、
みんなで進める連携と交流のまちづくり

(1) すべての人々が豊かな生活を満喫できるまちづくり（健康福祉）

▶ポイント

健康には、心の健康・頭の状態・体の健康の3つの側面があり、それはまた、生きがいの源泉でもあります。市民の健康を守り増進することは、まちづくりの最も基本的で重要な要件です。

▶めざす方向

誰もがどのような状況においても安心した生活が営めるよう、市民・行政・企業等が一体となって支え合い、人としての尊厳が守られ、健康で安心感を持って暮らせる社会をめざします。

- ・健康づくりの推進
- ・子育て支援の充実
- ・高齢者福祉の充実
- ・障害者(児)福祉の充実

(2) 生きがいと創造力を育み、豊かな心と人の和を広げるまちづくり（教育文化）

▶ポイント

地域の明るい将来展望を開くために、個性ある人格を最大限に尊重し、誰もが豊かに成長できるような社会を形成していくことが求められています。

▶めざす方向

木曾川学など地域の歴史・文化・自然・産業など優れた特性を活かし、市民が誇りを持ち、市民としての一体感が持てるまちづくりを進めます。また、家庭～学校～地域社会での人づくりを進め、市民一人ひとりが主体的な役割を果たせるまちをめざします。

- ・幼児・学校教育の充実
- ・生涯学習の充実
- ・青少年の健全育成
- ・文化・スポーツの振興

(3) 快適で安全な生き生きしたまちづくり（快適安全）

▶ポイント

暮らしやすく魅力のある生き生きしたまちをつくるためには、地域資源や施設を共有し、拠点機能を分担・連携しながら、市民の暮らしを支える都市基盤の充実が必要です。

さらに、火災や交通事故、地震などの自然災害から市民の生命と財産を守り、安心した暮らしを築いていく必要があります。

▶めざす方向

各地域の持つべき機能を考慮し、都市基盤の整備を進めるとともに、市民が豊かに安心して暮らせるよう快適な都市（まち）をめざします。

- ・都市空間の整備
- ・交通体系の整備
- ・防災体制の整備
- ・安全な市民生活の確保

(4) 自然と共生する環境にやさしいまちづくり（環境共生）

▶ポイント

地球温暖化などの環境問題については、例えば、CO₂吸収を促進する森林の緑化推進や里山などの地域環境保全など、地球環境にやさしいまちづくりを進める必要があります。

また、快適で衛生的な生活環境を整えるという面でも、ごみ問題への対応や下水道の普及も、重要な課題となっています。

▶めざす方向

木曾川など自然環境の保全を進めるとともに、ISO などへの取り組みをはじめ、資源循環型社会や、次の世代も快適に過ごせる環境と共生した美しいまちをめざします。

- ・循環型社会の形成
- ・環境の保全
- ・下水道の整備
- ・環境衛生施設の充実

(5) 活気に満ち、創造力にあふれるまちづくり（産業活力）

▶ポイント

産業はこれまで、航空機や自動車産業、繊維産業等を中心に発展してきましたが、今後は、この特色ある地域産業の活性化に加え、産業構造の変化や経営環境の変化に対応し、IT や VR 技術、ロボット技術、バイオテクノロジーの先端技術分野などでの新産業の創出や、河川環境楽園などの木曾三川公園周辺をはじめとした交流産業の振興も重要となります。

▶めざす方向

地域内外との多様な交流の推進や、観光資源や交流拠点の魅力化を図るとともに、地域文化や他産業との連携を図り、地域特性や時代の要請にあった産業の充実・創出に努め、活力あるまちづくりを進めます。

- ・新産業の創出
- ・地域産業の振興
- ・観光の振興
- ・勤労者福祉の充実

(6) 協働の精神に支えられた、みんなで進める連携と交流のまちづくり（市民協働）

▶ポイント

住みよいまちづくりを進めていくに当たっては、地域間の連携や交流・協力を推進することが必要となります。そして、市民ニーズの多様化・高度化など行政需要の変化に対応した行政機構の再編を図るとともに、効率的、合理的な財政運営が必要です。

▶めざす方向

市民等が各地域を舞台に、自ら考え行動するとともに、行政と市民が連携して、協働による個性あふれるまちづくりをめざします。

- ・市民参加によるまちづくりの推進
- ・地域情報化の推進
- ・交流事業の促進
- ・行財政運営の効率化

3 . 新市の都市構造

3-1 将来都市構造

木曽川が育み美濃山地に囲まれた豊かな自然と都市が調和し、すべての人々が生き生きと活動する元気で美しいまちを形成し持続していくため、新市が均衡ある発展を成し遂げていくことが重要です。そのため、地域の自然・歴史・文化・産業・交通等の要因を踏まえながら、調和のとれた都市となるよう、計画的なまちづくりを進めていきます。

回廊と拠点から構成される新市の将来都市構造を次ページの図に示します。

森の回廊

圏域の北側には、水源林としての里山が広がり、野生動植物の宝庫であるとともに、数多くの遺跡と遊歩道が分布し、広域的なレクリエーションの場ともなっています。これらの自然資源を「森の回廊」として位置付け、緑のネットワーク化を図ることにより、豊かな自然と共生した都市を創出していきます。

川の回廊

新境川や大安寺川等は、上流の水源地から、ため池、田園を経て、まちなか、そして木曽川へと流れ、良好な自然や田園風景を形成し、様々な表情を見せています。

木曽川やこれらの水辺空間を「川の回廊」として位置付け、新市の水循環の核として保全するとともに、自然とのふれあいの場となるよう親水性の確保を基本とし、豊かな水と緑の帯を作り出していきます。

まちの回廊

商業・公共施設などの都市機能が集積している国道 21 号、JR 高山本線、名鉄各務原線、東海北陸自動車道・岐阜各務原 IC、川島地区を、東西方向に“ 8 の字 ” 状にネットワーク化します。これらと、テクノプラザなどの産業関連機能が集積している南北交通軸を合わせ、「まちの回廊」と位置付けます。

「まちの回廊」では、都市機能の連携・強化を図るとともに、適正な市街地の整備を進め、快適で安全な都市空間の形成を図ります。

緑の拠点

交流の森^{*1}・城山の森^{*2}・各務の森・空の森^{*3}を「緑の拠点」として位置付け、自然環境の保全に努めながら、緑地や水辺を体感できる施設や、広域的な観光レクリエーション施設等を整備するなど、自然との共生・ふれあいの場を創出します。

*1 河川環境楽園、勤労青少年運動場周辺 *2 伊木山・城山周辺 *3 航空自衛隊岐阜基地周辺

都市拠点

まちの回廊に沿って、いくつかの『都市拠点』を設け、地域固有の文化を大切にしながら、生活・文化・交流・医療・産業など各種都市機能の集積を図り、快適で魅力ある市街地の形成をめざします。

産業拠点

テクノプラザ周辺、那加権現山東部地区、東海北陸自動車道・岐阜各務原 IC 周辺等を「産業拠点」と位置付け、産業基盤の整備を計画的に進め、新規産業の育成・誘致を図っていきます。

将来像：『元気な大交流都市』

- 公園都市・共生都市・快適産業都市へ -

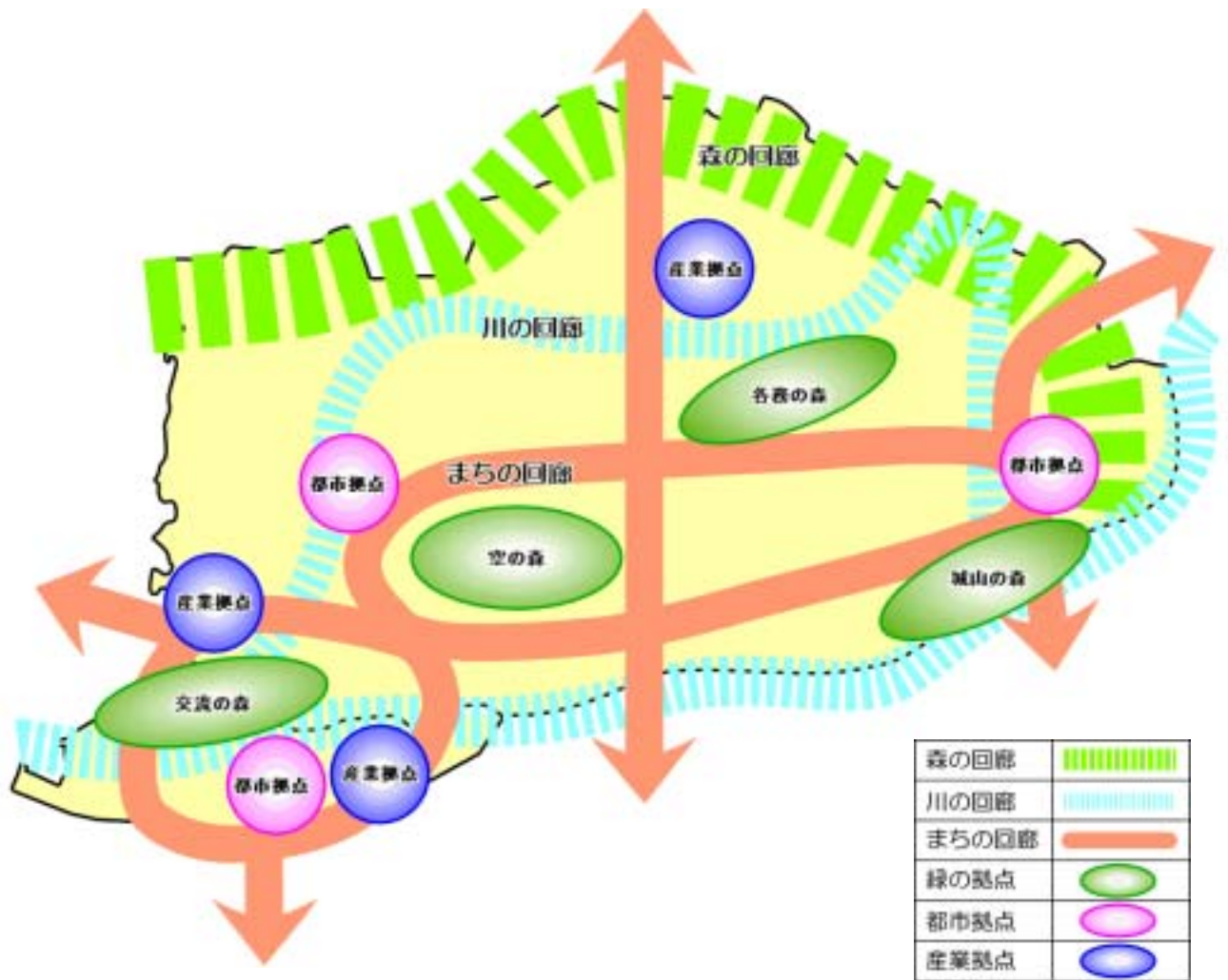


図 将来都市構造

3-2 将来の重要拠点

回廊と拠点から構成される新市の将来都市構造に基づき、今後、形成されるべき具体的な重要拠点を次ページの図に示します。

都市拠点（再掲）

岐阜大学農場跡地周辺、鶺沼・新鶺沼駅周辺、川島地区中心部周辺を都市の顔となる『都市拠点』として位置付け、市街地の緑・水辺空間の創造や、生活・文化・保健など各種都市機能の集積を図っていきます。

【シビックセンター】

岐阜大学農場跡地と市民公園を緑の核として、周辺の公共施設の緑化、河川や道路の緑の充実による都市軸の形成、水辺空間の整備等を進め、森に囲まれたシビックセンターの形成をめざします。

【鶺沼駅周辺】

道路・公園等の都市基盤の整備を図るとともに、鉄道による地域分断を解消する生活幹線道路を整備するなど居住環境の向上に努めます。

また、旧鶺沼宿地区との連携や、木曾川の自然環境・景観を生かしたまちづくりを進めます。

【川島地区中心部周辺】

旧役場を中心として、文教施設・商店街等があり、ここを文化サービス地区と位置付け、魅力ある都市拠点づくりを進めていきます。

産業拠点（再掲）

テクノプラザ周辺、東海北陸自動車道・岐阜各務原 IC 周辺等を『産業拠点』と位置付け、産業基盤の整備を計画的に進め、新規産業の誘致を図っていきます。

【テクノプラザ】

各務原地区のインダストリアルパーク^{*1}として、新たな産業立地の受け皿にふさわしい緑豊かな環境の中で、現在までに立地しているテクノプラザ等と連携し、情報産業、次世代産業が立地する新産業の拠点形成を図ります。

【IC 周辺】

交通利便性の高い東海北陸自動車道・岐阜各務原 IC 周辺地区において都市の新たな拠点にふさわしい市街地景観の形成を図りつつ、産業拠点づくりを進めます。

【製薬企業周辺】

エーザイ(株)川島工園を中心とした地域においては、工場内の緑と周辺道路の緑を一体化するなど、景観的にも周囲との調和が図られた、川島地区の産業拠点として位置付けていきます。

*1 広大な敷地にデザインを重視してゆったりと立地された工業団地。工場公園。産業公園。

